

利を見て義を思う



セコム会長 中山泰男
なかやま やすお

1976年に日本銀行へ入行した私は、物価の安定と金融システムの安定という日銀の使命を果たしながらバブル期も乗り越え、1998年から大分支店長、2003年から名古屋支店長として民間企業のトップとも交流を深めた。これらは、外から中央銀行を見る、知る機会として大変有意義だったが、私はある思いが強くなつていくことに気付いた。それは経済を動かす主役として、民間企業のダイナミズムの中で自分の可能性を試してみたい、というものだった。相撲に例えれば、日銀の役割は土俵の整備。これもとても大事なことでやりがいを感じていたが、力士として相撲を取りたいという気持ちが強くなつていったのだ。

相談したのは元上司で、日銀総裁も務めた三重野康さん。何度か「本気なのか？」と私の意志を確認され、その三重野さんから紹介されたのがセコムだった。そして2007年、日銀を去るときに、三重野さんから贈られた言葉が「利を見て義を思う」だった。

三重野さんは中国古典にも造詣が深く、論語をはじめ多くの言葉を折に触れ授けていただいた。企業としては利益を上げることが必要であるが、利益を上げる以前に考えないといけないことがある。人として踏むべき道にかなっているか、人としての道を外れて不義の利益を追っていないか考えてみよというのだ。この言葉が、論語として2500年以

上にわたり受け継がれてきたこと自体、多くの先人達が、人の道から外れてもなお、目の利益を追ってしまおうという事態が繰り返されてきたことの証左であろう。

同じく論語には、「君子は義に喩(さ)とり、小人は利に喩る」という言葉がある。君子は人の道にかなっているかで判断し、小人は損得で判断するということである。

セコムの創業者である飯田亮も、義を大切にしている。飯田が築き上げた理念の1つに「正しさの追求」がある。自分にとつてとか、セコムにとつての正しさではなく、社会にとつて正しいかを唯一の判断基準にする考え方である。まさに、義をもって利を積み上げることが企業理念として掲げているのである。

ここ数年、私の座右の書である洪沢栄一の『論語と算盤』が脚光を浴びている。根っこは同じだと思っているが、私が目指すのは「理念と利益の両立」である。ただし、車の両輪という関係性ではなく、理念が前輪で利益が後輪の自転車のイメージ。ハンドルとつながっている前輪は行先を左右し、ペダルとつながっている後輪は前へ進む動力になる。理念だけでは進まないし、利益だけでは目的地へたどり着けない。

義を心にとめ、遠くを見据え、しっかりとハンドルを握って、人としての道を迷いなく、勢いよく進んでいきたいと思うのである。「理念が先、利益が後」が私の信条である。